

---

バスター・キートンが自伝のなかで、どんなに面白いギャグでもタイミングに左右される、だから主人公の運命を観客が本気で心配しているときにギャグを盛りこんでも誰も笑わない、というようなことを言っています。

『ハックルベリー・フィンの冒けん』十六章の「筏のエピソード」(the Raft Episode) と呼ばれる、初版では省かれていたけれどその後は入れている版もあるこの箇所を、拙訳『ハックルベリー・フィンの冒けん』から省いたのも同じ理由からです。このエピソード自体は、どこか悪い夢のような雰囲気をつたえていて、とても面白いのですが、ハック・フィン十六章という文脈のなかでは、あきらかに全体の物語の流れを殺していると思っただけです。

とはいえ、読者がこれを読めない、というのも申し訳ないので、ここに拙訳を掲載する次第です。なかなか不思議なエピソードです。楽しんでいただけますよう。

柴田元幸

---